

「四国村」レポート

【目次】

- 施設概要
- [事業概要](#)
- [四国村訪問記](#)
 - [その1](#)
 - [その2](#)
 - [その3](#)
- [うどんの「わら家」](#)



【施設概要】

施設概要

- 運営主体 財団法人四国民家博物館
- 所在地 香川県高松市屋島中町91
- 電話 087-843-3111 (代表)
- 交通 瀬戸大橋高松西ICから国道11号線東へ13km
琴平電鉄琴電屋島駅から徒歩5分
JR高徳線屋島駅から徒歩10分
JR高松駅から6km
- 開村時間 4月～10月 8時30分～18時
11月～3月 8時30分～17時30分
- 休館日 なし
- 入村料金 大人800円 高校生500円 中学生400円 小学生300円 幼稚園児無料
- 開設 昭和51年
- URL <http://www.shikokumura.or.jp>



四国の主な道路をクルージングしていると、各地で「四国村」の看板を見ることができ。では、立地は、というと、高松市中心部から車でのおんぴりと20分ほどの源平合戦で有名な屋島、そのふもとにあたる場所である。

「四国村」の案内看板に従って進むが、入り口がよくわからない。行き過ぎてしまい、あわててUターンさせる。集客施設の入り口としては非常にあっさりとしたアプローチを過ぎると駐車場がある。ここも、いわゆる「お客様P」「バスP」のような案内区分がなく、スペースのレイアウトにもルールを感じない。「ここでのいいのかな」と思いながら車を止めて、同村のオフィスを探す。どうやら駐車場の脇に立つ白い洋館がそのようで、1階は「異人館」という店名のカフェ、2階が事務所となっていた。訪れる前に見た同村のホームページなどの印象から、日本の古い民家ばかりが導入のアイキャッチ及び演出になっているものと思っていたので、最初のおっさりとしたアプローチ、そしてこの白い洋館と続くと、別の施設かとまどってしまった。同村の名誉のために付け加えれば、この建築もただの洋館ではない。明治38年に神戸でイギリス人の住居として建てられたものを「異人館」として移築したものである。ここまでの「村」へのアプローチに、“ときめき感”の演出をお願いしたい。

その白い洋館の脇にある石畳の坂を少し上がると、入場券売り場があり、その坂道はさらに奥へと続いていた。我々はまず事務所で話を伺い、その後、村内を回ることとした。

「四国村」レポート

事業概要

同村には四国各地から移築された民家31棟が、当時の姿に復元され、保存されている。江戸時代に建てられたものから、最近まで利用されていたものまでさまざまである。うち、国指定の重要文化財が8棟、県指定の有形文化財が3棟、高松市指定の有形文化財が6棟、文化庁の文化財登録が灯籠なども含め27件となっていて、いかに重要かつ価値の高い民家が多いのかがおわかりだろう。

実は、同村の運営は公共のようなのだが、そうではない。現在の運営主体は財団法人の形を取っているが、主体はカトーレック株式会社（旧加藤陸運、本社高松市）で、昭和51年にオープンさせた。そのエピソードは興味深い。加藤陸運の社長は、定年退職した従業員の再雇用先として、うどん屋の経営を始められたそうだ。その店舗に、江戸時代末期に立てられた藁葺きの農家を移築したところ、味はもちろんのこと、店構えが評判を呼び、大人気となった。現在も同村の駐車場と隣接してその店「わら家」は営業している。（「わら家」のレポートを参照）

深い森の中に民家が点在する



うどん屋の店舗に古い民家を利用する、というアイデアを発想した社長の行動はそこで留まらなかった。あるとき、絵画の購入を検討されていたが、「この絵画は自分が買わなくても他の誰かが買うだろう。しかし、古い民家は自分が買わなければ、たとえ価値があるものでもいずれ朽ちてしまうだろう」と考えられた（購入を検討していた絵画と、候補に挙がっていた民家の価格がほぼ同額だったそうだ）。建造物の移築には通常かなり高額のコストがかかるものだが、うまいことに、陸運業なら自社で移築ができてコストもそれほどかからない。

こうして四国各地の民家や建造物の収集が始まり、四国村を開村するに至ったのである。当初はここ、屋島にもとからあった私有地で開村したが、後に払い下げの国有林を入手して敷地を拡大、現在約51,000平方メートル（東京ドームの1.1倍、つまりほぼ同じ）となった。社長の趣味、そして美学が凝縮した結果と言ってもよいだろう。

民家の展示の他には、さまざまなイベントが行われている。ワークショップでは、今までに「陶芸教室」、「だるまおとし」や“独楽”などを作って遊ぶ「手作りふるさと遊び」、「季節の料理教室」などの体験イベントが開催され、特に人気の高い「陶芸教室」は月1回開催されている。子供でも参加できるプログラムが揃っており、学校から遠足の一環として訪れるケースも多いそうで、事実、我々の訪問日も小学校高学年と見られる子供たちの団体を見ることができた。

料理教室の様子（四国村ホームページより）



年末年始には、「しめ縄作り」、「餅つき」、「振舞酒」、「どんど焼き」など、盛りだくさんのイベントが予定されている。

さらに、村内にある農村歌舞伎の舞台「玉藻座」では、「春はこんびら、夏は屋島」と言われるほど、すっかり四国の風物詩となった「屋

秋に行われたイベントのチラシ

島篝火歌舞伎」や「子供歌舞伎」のほかに、クラシックやポップスの野外コンサートも行われている。

異人館では毎月サロンコンサートを開催、また秋には音楽を聴きながら中秋の名月を鑑賞する「観月会」が開催されるなど、非常に充実した活動を続けている。

同村のスタッフは5人で、うちひとりが学芸員資格を持っている。他にパートのスタッフ3人が受付業務を行っているとのことである。

お話を一通り伺った後、さっそく村内を回ることにした。以下、印象に残った建造物、演出などをご紹介します。



[次へ](#) 



空間
通信
[トップ](#)

「四国村」レポート

四国村訪問記

その1

四国村は、山のふもとに入口があり、頂上を目指して登ったあと、再び下山するという動線に水、緑と建物を調和させて配置した構造となっている。

当日は、朝から雨がしとしとと降り続いていた。その風情も捨てがたい。森の緑がいつそう美しく深い色に感じられる。石畳の坂道を登っていき、左に折れる細い階段へと進む。眼前に開けたのは「農村歌舞伎舞台」であった。江戸時代末期に小豆島に建てられた茅葺き屋根の大きな建物である。廻り舞台、楽屋、義太夫の床、お囃子座が付随している。小豆島の漁民、農民など地元の人々が自ら役者となり、芝居を演じたという。ここでは観客席がコロシム形式に作られていて、約1,000人が観覧できようになっている。雨のためか、観客席には青いシートがかけられていたのが残念だが、もしも雨上がりの明日、ここを使うというのであれば、お客様の着衣を汚さないという非常に気の利いた管理であるといえよう。



観客席の脇の細い通路を上がっていくと、「旧山下家住宅」がある。茅葺き屋根、平屋建てで、江戸時代の東讃岐地方では典型的な一般農家の住居である。家の半分は農作業用の土間で、あとの半分に親兄弟若夫婦が大勢で暮らしていたという。

実は、どの建造物にも解説板が立てられていて、どこに特徴があり、価値があるのかがよくわかるようになっている。この解説板が秀逸なのは、移築前の本来立てられていた場所の地図があることと、建てられた時期には世界的にどのような出来事があったのか、解説が付け加えられていることである。ただ単に所在地や年号が書かれているよりも、これによってイメージや時代背景や想起しやすくなり、理解の一助となることは間違いない。

また、解説内容も「親兄弟大勢で暮らしていたため、夫婦生活もままならなかったそうである」といった大人向けの表現となっていたのも目を引く。建造物そのものについてだけでなく、暮らしぶりについても関心を喚起できる。ここが民間運営の良いところだ。行政だと“夫婦生活”ではなく“ふれあい”だろう。

そのほかに、音声による解説も聞くことができるようになっている。これは、音をただ流しっぱなしにしているのではなく、希望者がボタンを押すと流れるのである。しかも地元の方で語りかけてくるので、ついつい引き込まれてしまう、なかなかグッドな演出であった。まさに、四国に来ているんだな！と実感できる。

気の利いた内容が目を引く解説板



「砂糖しめ小屋」は丸い、茅葺きなのにとんがり屋根のかわいらしい建物である。現在では香川県内に2棟しか残っていない、世界的にも大変珍しい建築である。

砂糖しめ小屋 (パンフレットより)

中に入ると1メートルおきに柱が立てられていて、中央にはサトウキビを絞る石臼が3つ並んでいる。ここでは、牛が石臼の腕木を一日中ぐるぐると回していたのだそうだ。そのためこの建物は丸く作られているのである。そのことを知ってから建物を見ると、確かに屋内は牛が回るのにぴったりのサイズである。他に、当時使われていた道具や、衣服なども展示されている。衣服はかなり汚れてほつれていて、いかにもよく使い込まれた感じである。



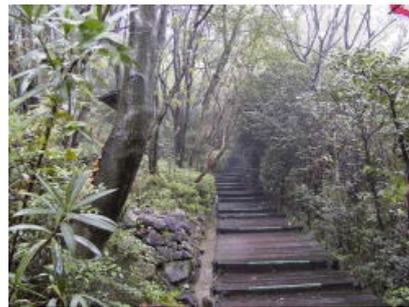
説明ボタンを押すと「モーウ〜」という牛の鳴き声と石臼を引く音と共に解説が始まり、例によって方言を駆使しているから、臨場感たっぷりに聞かせてくれる。

この建物には興味深いエピソードがある。もともと四国には砂糖はなかったが、約250年前の江戸時代、奄美大島から四国遍路の途中、病に倒れた武士・関良介を、讃岐の医師・向山周慶が助けた。そのお礼に関良介は、国禁を犯して藩外持ち出し禁止の砂糖キビを讃岐に植え、向山周慶と共に砂糖作りを始めたのである。現在でも香川と徳島の一部で昔ながらの製法で砂糖が作られていて、高級和菓子の原料になっているそうだ。(人名など詳細は忘れていましたので、大阪市の「きぬき和三宝ばいこう堂」さんのHPを参考にしました。URL <http://baikoudou.com/migi.html>)

こういったエピソードを知ると、なおさら建物への印象が深くなるものである。建築のハードや技術ばかり追わない展示が、とても新鮮に感じるのである。

順路表示に従い、坂道を上がっていくと、茶堂がある。これは四国の古い街道沿いにあちこち建っていたお堂で、もとは仏様をまつり、弘法大師の命日などに道行く人に茶が振る舞われたところである。その後、四国遍路の接待、休み場、村人の集会、そして男女の密会などに利用されていたのだそうだ。

森の中へ続く木道。散策するだけでも楽しい



ここに移築されたお堂は愛媛県内にあったもので、18世紀後半頃のものだとされている。作家の瀬戸内寂聴さんによって「遊庵」と名付けられていたが、残念ながら、それがどういういきさつかの説明は見あたらなかった。

茶堂からさらに山頂へと抜ける道は竹林になっている。非常に美しい、しっとりとした風情である。道端には小さなお地蔵様が並んでいる。このお地蔵様は世界的彫刻家、流政之氏によって創られたそうだ。村内の石畳の坂も流氏の手によるもので、「流れ坂」と名付けられている。一見すると石が無造作に並べられているようだが、美しく趣のある「作品」となっている。特に雨の日は実に情緒のある風景である。まさに、「和」の空間、静寂のただずまいを実感できる。ちなみに、竹林の道端のお地蔵様には恋の成就に効き目があるという。

道ばたのお地蔵様



次へ 



「四国村」レポート

その2

こうして、竹林を抜けると、高台に出る。ここが村の山頂にあたる。ここには、「燈台退息所」が3棟並んで展示されている。退息所とは、燈台に勤務していた職員の宿舎である。最初は淡路島の北端にあった、1871年（明治4年）から使われてきた「江崎燈台」の退息所で、英国技師によって作られた、洋風で石造りの重厚な建造物である。1995年まで淡路島にあったが、阪神・淡路大震災により亀裂が入るなどの大きな被害があったため、同村に移築されたものである。

中央は香川県坂出市の沖合、鍋島にあった「鍋島燈台」の退息所、次が愛媛県松山市の沖合クダコ水道にある「クダコ島燈台」の退息所である。

この一帯は今までとはがらりと雰囲気が変わる。ベンチがいくつも並べられ、花がたくさん植えられていて、洋風なガーデンといった様相である。高台にあり、非常に見晴らしがよい。ただし、雨のため景色を見ることはできなかった。花壇が一部造成中だったが、このエリアはどうやらガーデン風の休憩所になるようだった。女性客にはウケがいいかも知れないが、施設全体として「和」のイメージと違和感があるのではないか。他とは離れた高台という場所にあるため、雰囲気を壊すことはないという判断なのだろう。また、全体的に似たような印象の民家が並んでいる中、洋風な造りの退息所とガーデンはアクセントとなり、飽きさせない工夫と取ることできる。

ここからは坂道を下ることになる。次は植物園「物語の森」庭園である。しかし、残念ながら造成中であつたり、植え替え中であつたりして、庭園の雰囲気を味わうことはできなかった。かなり広い敷地を取っているので、花の時期は見事だろうな、と思う。苗の植え替えなどを行っているスタッフから「こんにちは」と声をかけられた。あいさつをちゃんとできるのは、集客施設では極めて重要なことであり、それが普通にできていることに敬意を表したい。

雨は依然降ったりやんだりである。駐車場にはそれなりの台数が停まっていたので、来場者はいるはずなのだが、広い村内ではあまりすれ違うこともなく、非常に静かである。そういえば事務所で話を伺っているときに見かけた遠足の小学生たちは、もう帰ってしまったのだろうか。

続いて高知の高級和紙を作っていた「楮（こうぞ）蒸し小屋」、「下木家住宅」、「添水唐白小屋」などを見学した。途中、「猪垣」と呼ばれる“罫”を見ることができた。これは石を積み上げて作った垣根で、畑の作物を荒らしに来たイノシ

高台の退息所



ここは今までとうって変わって洋風



植物園「物語の森」は造成中だった



シや鹿を捕らえるものである。イノシシや鹿は習性として垣根を飛び越えずに周囲をぐるぐるとまわるため、徳島の「猪垣」は囲いの根元に落とし穴を掘り、生け捕りにして食べてしまうという一石二鳥な仕掛けである。小豆島の「猪垣」は粘土に松葉を入れて固めたもので、落とし穴はないようだ。比較してみると違いがわかり、面白い。

「久米通賢先生旧宅」は中が研修室として利用されている。外は茅葺き屋根の古い民家だが、研修室としても使われていることから、内装は“会議室化”されているのだろうと想像していたら、ゴメンなさい。

縁側から中庭が見える広い和室があり、上がり込んで座ってみると窓から庭の花が見えるなど風情のある落ち着いた和室であった。ここで日本文化の勉強会などが行われているということだ。

ところで久米通賢先生とは誰なのか、不覚にも私は知らなかった。平賀源内とともに讃岐を代表する江戸時代の科学者だそう。軍船、大砲、ピストルなどの武器から、扇風機といったものまで発明し、香川県坂出市の塩田の基盤を作ったという香川県の名士である。

「久米通賢先生旧宅」内は広い和室



障子を開けると中庭が見える



[次へ](#) 



空間
通信
トップ

「四国村」レポート

その3

平家の落人で有名な祖谷の民家「中石家住宅」は母屋が立派なのに比べて隠居屋が小さく、なぜだか寂しい気持ちになった。隠居したら、つまり年を取るとこんなに小さな家に移り住まなくてはならないなんて。

とはいえ、母屋もそれほど大きいわけではないが、茅葺き屋根が立派で、昔話の挿し絵に出てくる典型的な日本民家という印象だったが、この地域独特の建築なのだそうだ。

「丸亀藩御用蔵」は約200年前に建てられた京極藩の米蔵である。海鼠壁（なまこかべ）が美しい。中は民俗資料館になっていて、民具が展示されている。ここは特別料金が必要で、100円玉を入れるとゲートが回転して一人だけの中に入ることができる。

中には御輿など祭事に使われるものや、農機具、小豆島で行われていた歌舞伎の様子の写真、衣装などが数多く展示されていた。しかし、解説のほとんどが手書きで、インクの色があせて消えかかっているものやセロハンテープがはがれているもの、なんと破けているものなどもあり、また壁の色が変色しているところも見られ、資料館としてはかなり悲しい状況になっていた。

せっかく貴重な資料を展示していても、これでは手作りの良さよりも退廃的な印象が際だってしまうだろう。せっかくの村が醸し出す文化性がチープに見えてしまう。ここでは、四国は歌舞伎が盛んだったことを理解して、次の建物へ移動した。

アーチ型の古い橋と石でできた低い建物が並んでいる。「めがね橋」と「石蔵」で、どちらも明治中期に作られ、昔の金比羅街道沿いにあったものである。「めがね橋」はてっぺんにクサビ石に鯉と唐獅子の彫刻が施されているが、このような橋は日本に1つしかない珍しいものだそうだ。最初にこの橋を見たとき、造形がモダンであり古さを感じなかったので、展示物だとは思わずこれも流氏の作品かと勘違いしてしまうほどだった。

「石蔵」はレンガを床に張った贅沢でモダンな建物で、しかも現在でも狂いが無い、優れた技術によるものだ。中はギャラリーとして一般に開放していて、我々が訪れた日も個展が開かれていた。作品が並べられている横で作家と見られる男性が来客の応対をしていた。このギャラリーは無料で借りることができる。また、ギャラリーを目的に来園された方は、通常の入場料800円のところが300円になるという。このような点で、施設運営が営利目的だけではなく、文化の醸成や育成も目指していることがうかがえる。

「醤油蔵」と「麹室」では、中にも外にも醤油樽がたくさん積まれていて、作りたての醤油の香りがしてきそうな雰囲気である。醤油は江戸時代から作られていたそうで、「醤油蔵」の中には大豆を茹でる大釜や桶、絞り機などが当時のままに置

「丸亀藩御用蔵」の海鼠壁と解説板



資料館の展示。右半分は壁紙が黄ばんでいる



小豆島は歌舞伎が盛んだった



かれていた。

さて、我々が見ている特に印象に残ったのは、「吉野家住宅」である。ここは漁師の家で、使っていた船がそのまま家の前に置かれていた。平屋建て本瓦葺きの、今まで見てきた建物の中では最もみすばらしい。徳島県の太平洋に面した断崖下にあったそうで、強風を防ぐため、家の周囲を石垣で囲んでいる。ここにも涙ながらのエピソードがある。この漁師の家があったあたりは鰯の漁場だったが、他地域から網元が進出してきて、大漁が続き、かなりの富を手にしていった。そこで、地元の漁師も借金をして大網を買ったところ、その年から不漁が続いて大損をしてしまい、多額の借金が残ってしまったという。そのため、他の地域では住居が建て替えられたのに、この地域だけは建て替えができず昔のままの建物が残り、それが皮肉にも貴重な文化財になっているのだそうだ。

船にはフジツボがへばりついたまま、タコ漁に使われた蛸壺が庭先の棚に無造作に置かれているなど、ついこの間まで漁に使っていたのではないかと思われるほど、非常にリアリティを感じた。展示の際には、とかく手を入れたり説明の札を付けてしまったりしがちなところを、敢えて当時のそのままの雰囲気を残しているところが却って記憶に残り、他の漁師の真似をしたものの、トホホな状況に陥ってしまった人間の弱さと頑固さが何となく感じられ、強烈な印象を残すことになった。

なお、村内のところどころには、建築以外の自然、産業史にフォーカスをあてた展示物も配されている。

雨天の中、屋外空間である四国村を回るのはためらわれたが、かえって日本的なしっとりとした良い風景を堪能することができた。敢えて、ぜひとも雨の日に四国村を訪れて、時間を気にせず、ゆっくりと歩くのを勧めたい。そして、その際にはスニーカーの類を履いていくことを合わせて勧めする。流れ坂の石畳は濡れると滑りやすく、特に下りはちょっと怖い。私は何度かバランスを崩し、転びそうになってしまった。とかく日本人は靴の選び方が下手だから。

断片的ではあろうが、さまざまな民家を通じて、四国の文化や風土を垣間見ることができた。もちろん、これで全部の魅力を語れるわけではない。ここは一度きりでなく、何度か足を運んで、散策したり、景色を眺めたり、ぼんやりしたり、そして懐かしさに触れたり、そんなことができる施設である。時間があればイベントにも参加してみたい、という気持ちにさせられた、久しぶりに「あたり！」な施設であったとお伝えしたい。

「吉野家住宅」は漁師の家（パンフレットより）



手前にあるのが「大がめ」。中に入って大きさを確かめてもかまわない



「流れ坂」は雨がよく似合う・・・



[次へ](#) 



「四国村」レポート

うどんの「わら家」

四国村を出て、駐車場で我々が止めた位置からちょっと下に位置する場所に、手打ちうどん屋「わら家」がある。施設概要の項で紹介した、いわば四国村の“ルーツ”である。なるほど、藁葺き屋根に水車が回る大きな古い民家を使っている。今まで見てきた四国村の雰囲気そのまま、といった感じである。広い村内を歩き回って小腹も空いたことだし、ここの取材もはずせない、ということにして入ってみた。

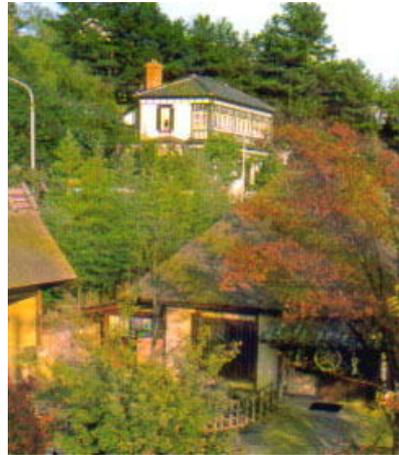
引き戸を開けてびっくり。店内は厨房がいきなり入口から丸見えで、これは東京的な印象かも知れないが、立ち食いそば屋かと思うほどだった。

その広い厨房、社員食堂か学生食堂としてイメージしてもらった方がピンとくるかもしれない。煌々と蛍光灯が明るく、大きな鍋やら、ざるやら、さまざまな器具類が乱雑に置いてあるのが見えてしまう。

なんの変哲もない厨房なのに、なぜわざわざオープンキッチンにしているのだろうか？最初から、外観とのギャップに興ざめであった。

どんな事情があるのかは当然わからないけれど、できれば客から見えないようにしたほうがいいと思う。さすがに金券を自動販売機で買うようなことはなかったが、料金は先払いである。我々はスタンダードに釜揚げうどんを注文した。

「わら家」の外観（リーフレットより）



客席の方は民芸調になっていて、天井が高く、壁や柱は濃い色に変色していて、よい意味で歴史を感じさせる。平日、それも雨の昼下がりのせいかな、3組ほどがテーブルに付いているだけで広い店内はガラガラだった。

三角巾をしたフロアスタッフ（中年の女性）がゴマやネギ、ショウガのたくさん入った器と、つゆの入った大きなとっくりと、空の器をひとり2つずつ持ってきた。「ひとつは○○○用です」と言ったのだが、なんと言ったのかはっきりと聞き取れない。一つはつゆを入れるとして、もう一つは何に使うんだ？一つはネギを入れるつゆ、もう一つはゴマを入れるつゆか？なんていろいろ言っていたが、店内をぐるりと見回すとセルフサービスの給茶器があり、その前に我々の目の前にあるのと同じ器が山盛りになっていた。そういえばお茶が来ていない。つまり自分でお茶をいれるわけね。

というわけで、お茶を飲みつつうどんが来るのを待っていたが、これがなかなか来ない。厨房の中のスタッフは全員、気を入れて働いている感じが感じられない。のんびり・ダラダラと片づけをしたりしている。店員同士世間話の花も咲いている。時折大きな鍋をかき回している女性はいたが、あれは我々の分なのかどうかもわからない。混んでいるなら遅くても仕方がないが、こんなに空いているのになんで来ないんだ？短気な編集長がだんだんイライラしてくるのがわかる。困ったなあ。厨房内が見えてしまうのでますますイライラ観が募ってしまうのだった。

そこで、女性の店員さんに「あとどれくらいかかるの？」と聞いたら「もう少しお待ちくださいねー」と言うが、別に申し訳なさそうな様子もない。結局、我々も含めて4組の客、これで混雑したのでしょうか。20分ちょっとたってから（！）、やっと所望した釜揚げうどんがやってきた。つゆは、“いりこだし”が利いていてなかなか美味。麺は私には柔らかめな気がしたが、釜揚げだからこんなものなのかな？レジの脇でおみやげのうどんも売られていて、最初はおいしかったら買っていこう、と言っていたのだが、結局ここでは買わなかった。おいしかったけどうどんを食べるまでにそんな経緯が

店内の様子（リーフレットより）



あったため、少し気がそがれてしまったからである。

観光客相手の店だと割り切って、リピートなど期待していないためか、店員の接客応対やサービスは“こんなもの”と割り切っているのだろう。それは大きな間違いである。観光客相手だからこそ、また来ていただけるように味はもちろん、サービスには気を遣う必要があるわけで、この点はぜひ考慮していただければと思う。

それは、“自分の店だけ来ればよい”という度量の小さなコンセプトは四国村の文化哲学を冒とくすることになるからである。

どのようないきさつがあるにしろ、民間会社で、それも集客事業性とはほど遠いところで（失礼）ここまで徹底した運営をされているのは、四国の文化を、建物を通じて今に残し、後世に伝えるという真摯な事業主＝加藤会長の哲学があるからこそである。

四国村には、四国＝地域として捉え、考え、語ろうという反映である。ゆえに、“たかがうどん屋の応対”ひとつと侮ってはいけない。来場者にとって、そこでの楽しくすばらしい体験が屋島、高松、そして四国へのリピートにつながるのだ。そのリピートが、四国の文化を各地に伝えていく。それが四国村の情報発信なのである。

(編集部 池上)

 [「四国村」レポートTOPに戻る](#)

